

怨念に手向け 坐禪入定

文 中野 東禪

鞭牛さまのまわりには、いろいろな人がいた。有力な檀那衆のほかにも、山伏常泉坊や、あばれものの赤腹太夫、力自慢の茂兵衛などの名が語りつがれている。

そしてまた、女性も鞭牛さまをとりまく人間模様の一コマであった。

閉伊街道の開削に従事していた宝暦九年の春、花輪村長沢の岩屋で七日の坐禪をしていたとき、鞭牛さまを慕う娘が通つて来ていた。その娘の一途な純情に、五十歳になる鞭牛さまの心中に波立つ情感があつたとしてもふしぎではない。

しかし、家をすて寺をすてたほいど（こじき）和尚の自分には、娘一人の生涯を傷つけ、すてきれない自己の欲情に今さら束縛されることの方が、はるかにおそろしかった。

その後、鞭牛さまは花輪村に近よらなかつたといわれる。心血そそいだ十三仏の霊場も、また安住の地とはならなかつた。

宝暦十一年三月、よき相談相手でもあり協力者だつた大沢村の鈴木門助さんがなくなつた。橋をかけたり、飢人救済に尽力した奇特な人であつた。

こうして、晩年の鞭牛さまの身辺にも、秋の風が吹きはじめていた。だが、この北上山地での霖雨、冷夏、降霜、洪水、凶作は数年に一度忘れることなく、どこかをおそつていた。

鞭牛さまの足は、閉伊川筋から第二のふるさと橋野村へと近づいていた。

織笠から大槌へぬける裏街道、山田町三本小杉の道、宮古の七戻りの難所、織笠川への架橋は山田町の善治さんの寄進で、さらに、六十八歳の晩年になると、橋野と鶴の住居間の剣の難所を開き、小槌川に橋をかけ、御廟坂の近道を開削した。

七十二歳のとき、師僧の大倒見牛和尚と二人で、吉里吉里と大槌間の海岸地帯の岩山に道路を開き、これが老僧二人の最後の仕事になった。

鞭牛さまが用いた工具は、つるはし、玄翁、たがねなどであつたが、きたえあげた体とはいへ七十二歳の老人にとって、鉄のつるはしは決して軽いものではなかつたはずである。だが、それが、倦むことを知らない祈りの実践だったのである。

それよりずっと以前の明和四年、鞭牛さま五十八歳のとき、誰言うともなく老後を案ずる声がおこり、鞭牛さま扶養の願いが、関係町村の名主や肝煎りなどの連名で南部藩主利

正公へ提出された。藩主もその功に感じ、ここに、毎年藩主より五貫文、宮古御代官支配の関係町村より十貫文、あわせて十五貫文の終身年金が喜捨されることになっていた。

そして、安永八年正月、七十歳になった鞭牛さまを祝して関係者があつまり、古稀の祝宴を開いた。それは鞭牛さまの人生の中の晴れがましくも楽しい一こまであった。鞭牛さまは、その年隠居屋敷の中に、祖父母、父母のために四基の墓を建てて冥福を祈るのを日課としていた。

しかし、晩年の鞭牛さまは、あいかわらず道供養橋供養碑のほかに、南無阿弥陀仏碑、弁財天碑などを建てつづけていた。さらに、宮古の黒崎大明神に、海難防止と海難者供養のために宝剣三振を寄進している。

ちょうどそのころ、稀代の『正法眼蔵』研究僧、瞎道かつどう本光和尚は奥羽の地を巡錫し、講筵をはかつていた。この奥羽の地にも学問復興の風が伝わっていた。そうした中で鞭牛さまは、「愚僧、わけても浅学非才の生まれなれば、なかなか衆生済度と申すことは思いもよらず。ただ道をひらき、旅客の助けとなるのみ」というのであった。

だが、鞭牛和尚が道普請をするところは、ただ人助けのためだけであろうか。

その人助けは供養だったのではないだろうか。鞭牛さまにとって南無阿弥陀仏碑を建て、十三仏をまつり、亡き人を供養し、道をまつり、橋を供養するのは、悠久の生命を礼拝することであった。そして何よりも、天災や飢饉などで罪をなくして死んだ多くの人のうらみをはらし、怨念を昇華させる大慈悲行であった。

彼らのうらみをはらすものは、うらみをこえるこころの実現以外にはない。すべての差別をこえて一切をうけ入れるものは道であり、橋であった。

舟を置き橋を渡すも布施の壇度なり

修証儀

とはそのことであつた。

鞭牛さまは、玄翁をふるい石をくぐくという確たる仕事をつづけながら、たましいの世界をみつめ、現実と死者の世界との中間を、虚空をあるくように歩んできたのであろう。

それは、鞭牛さまが“行者”であったからである。彼がいう“ひとのため”とは、人に与える思い上がりの強化の念ではない。ただ人につくし死者につくす行者の行だったのである。

それは、牧庵鞭牛和尚の最後をもちがった。

天明二年（一七八二）八月二十六日、病床で村人たちに別れをつけると、用意の棺桶に

入って坐禅を組んだ。蓋をして息ぬきの竹筒がすえられた。隠居屋敷の一角の穴におろし、読経の中で村人たちは土をかけた。

礼拝にあとをたたない人々の見守る中で、棺の中の読経の声は七日後の九月二日、ついに途絶えた。七十三歳の坐禅入定であった。

翌天明三年は、浅間山が大噴火し、二万人が死んだ。南部藩の飢饉は四万人が餓死、二万四千人が疫死、三千人が逃亡した。

そして、鞭牛さま没後七年、すべてを見つくした大倒見牛和尚は、吉里吉里の吉祥寺に八十歳の生涯をとじたのである。

(おわり)

(注) 平成二三年一〇月著者中野 東禅先生より使用許可を頂いております。

参考資料

牧庵鞭牛の生涯

伊藤麟市著

鞭牛

佐藤善一著

みちのく聖僧

岡本文良著

写真集 鞭牛和尚の足跡を訪ねて

佐藤仁志著